りは午未の間に當り、海上七十里程あり、三宅島よりは五里ばかり南へはなれ、八丈灘に近き島へ汐行甚だ早し、海邊巖尖にして、常に洗波高く、山崖峩々と聳へて樵路甚だ嶮きなり、海陸の通ひ安からず、猶かつ船の出入危く、唯一艘の島船にて國地との交易をなすに、其の便年に稀なり、しかも四方一里に過ぎざる小島なるゆへ、物毎至つて乏しく見ゆる、四季の時候寒暑とも三宅島に不異、また人物もかたち言語は三宅に等しく甚律儀なり、男女とも髪は細き苧繩にて束ね、身にはひざかくるゝばかりのものを著し、帶には葛藤かづらやうのものを打和らげ、繩になひて用ゆ、

〔伊豆七島調書〕御藏島 東西廿五町程、南北一里程、江戸より海上六十四里程

一家數三十一軒、人數男五十四人女六十人 牛馬なし、外に流人男五人、

富賀大明神　鎌取大明神　御笥大明神　神主加藤藏人

寺一ケ所 豆州三宅島大林寺末淨土宗　萬藏寺

一、御年貢金一兩永百拾八文づゝ、年々定納仕候

一爲御救米、一ケ年米七斗宛被下置候、

一御園米無御座候

一此島田方無之、畑少々有之、麥、粟、稗、大豆、大根、蕪少々作り、其外葛、野老、薯蕷、あした草等取、夫食足粮に仕候、

一此島稼には、男は薪を取、江戸へ積出し、夏秋は鰹を釣、其外かさご、鮫等を取、渡世仕候、女は蠶を少々飼、葛、野老取、渡世仕候、

一廻船壹艘漁船貳艘御座候、

一流人、渡世之儀、親類より見繼無之者は、百姓之手傳致、渡世仕候、〇中略